



## 子たくさん研究室でふと思うこと

中央大学の片山建二先生からバトンを引き継ぎました、東京理科大学の由井宏治です。片山先生とは、東京大学工学部の澤田嗣郎先生の研究室で、学生から助手時代まで10年近く一緒に仕事をさせていただきました。トライアスロンもこなす片山先生からのバトン、落とさないように次の走者につなげるのか、どきどきしながら書かせていただきます。

ご縁があって東京理科大学で研究室を立ち上げ早6年目。これを書いている4月はすぐそばの皇居の外堀通り沿いの桜が大変きれいで、小京都の佇まいを見せる神楽坂には、本格フランス料理店をはじめおしゃれな店が軒を連ねる大変良い立地です。裏をかえせばこんな土地で1研究室の割当て面積が広いはずもなく、きっと皆さんがびっくりされるほどのスペースで、大変多くの学生に囲まれて研究室生活を送っています。

今、多くのと書きましたが、具体的にはスタッフ私人に対して、学生21名。21人分のテーマづくり・様々な内部・外部発表の要旨訂正・実験に必要な物品の購入…。冷静に考えると、この比は明らかにぜったい無理…。と思えるのですが、案ずるより産むが易し!? 意外と子(学生)沢山でも、人さえいれば何とかなる、そんな楽天さが身についてきた今日この頃です。

しかし、なぜ何とかなっているのか、その理由をもう少し考えますと、そこに分析化学という学問分野のもつ「懐の広さ」があるように思います。無理を承知でできるだけ学生一人一人の要望・関心に沿ったテーマづくりをしています。手法は限られてしまうもの不思議とテーマはかぶらず、むしろ私が想定していなかった対象に出会うことも少なくありません。人が集まれば、興味・関心も人それぞれ。さらに狭い建物の中に異なる研究分野の研究室が密集していますと近隣の学科の先生から、こんなの測れないかな? とお声がけもよくいただき、ますます世界が広がっていきます。手法が限られていても、世界がどんどん広がっていくのは「見る・計る」ことを軸とする分析化学の分野横断的な性格のなせる技なのかもしれません。

ただ、学生の興味のまま、他の先生の依頼のまま進めていると、気がついたら各論の工夫に落ち着いてしまうこともしばしば。それはそれで面白いのですが、分野横断的ゆえ、何かもっと普遍的に通用するような分析手法や技術を生み出したい、そう思う気持ちも一方で募ってきます。普遍性を持つ手法や技術を開発するには、まず分野を超えて適用できる根本的な新しい現象(知)を自分で発見して、さらにそれを新しい分析手法(技)や計測機器(物)まで昇華させねばならず、これを一人でやろうとすると、なかなか超人的なことのようには思えます。

これまでの自分を振り返ると、様々な新しいきっかけは、異分野の人と出会ったときに得たように思います。異分野の人と出会う「きっかけ」。これが今後ますます重要になるのかもしれませんが。そう考えますと、様々な分野の「知」「技」「物」を探求・開発する研究者が一堂に会せる場を作り出すポテンシャルを有しているのが、分析化学会の他にない大きな魅力のように思います。さらに「見る・計る」を軸にして、異分野に積極的に乗り



子たくさんならでは? マイクロバス1台を貸し切ったの研究室旅行でのスナップ

出して、新しい共同研究を立ち上げ易い、というのも大きな強みかもしれません。

現在、「分析化学」誌の編集理事をしておりますが、手始めに、「手法」割りになりがちなこれまでの特集号テーマに対して、「対象」を軸に据えた「年間特集」企画を編集委員の皆様と立ち上げさせていただきました。同じ会にいながこれまで出会うことのなかった人と出会う「きっかけ」づくり。そう思うと、もしかしたら春と秋にある討論会や年会で同じような分野割りではもったいないかもしれません。例えば討論会と年会では、発表会場を測定対象(知)と測定手法(技)による分野割りにして、春と秋とで異なる研究者に出会えるようにすることは有効かもしれません。さらに東京コンファレンスで企業と大学・研究所の研究者がより活発にコミュニケーションできる場ができると、普及する新しい装置(物)まで昇華するチャンスがより増すように思えます。

余談にはなりますが、どの学協会をも取り巻く昨今の厳しい情勢の中、こんなたった一人の若手の意見を汲み上げ、さらに「年間特集」冊子体作成(来年春発行予定)の後押しまでくださったことは、私にとって日本分析化学会に集う日本全国の先生や研究者の皆さまの心の温かさや熱意を感じずにはいられない出来事となりました。考えてみたら「会」とは「会う」ということ。学問を通じた新しい「人」との出会い。それこそが学会の最大の価値なのかもしれません。

随より始めよ。まずは足元の子たくさん研究室を、そこに集う学生が「楽しい」「エキサイティング」と思えることに出会える、また周りの異分野の先生・研究者の方と新しい「知」を目指した探求ができる、そんな場にしていきたい…。身近にもやらなくてはいけないことがまだまだ山のようにありそうです。そろそろバトンを渡す次のリレー走者、北海道大学の石坂先生の姿が見えてきました! 渋い声とはにかみ風笑顔? が素敵な石坂先生のエッセイに乞うご期待です。

〔東京理科大学理学部 由井宏治〕